



中教審「令和の日本型学校教育」答申を考える

～一人一台端末・Wi-Fi環境の整備が目指すもの～

週末の榴岡公園では、桜の花が見事に咲き始めていました。コロナ禍でも季節は移ろい、春の訪れを感じる時期になりました。

週明けの29日（月）。19日の卒業式を欠席した6年生の児童のための「卒業式」を全職員参加の中、体育館で行いました。これで無事136名の児童を卒業させることができました。御協力いただいた皆様ありがとうございました。

さて、今年1月、中教審から「令和の日本型学校教育」についての答申が出されました。気になったのは「令和の」の部分。もちろん、現在令和3年なので、未来志向の学校の有様についての内容であることは容易に推察できます。

では、「平成の」日本型学校教育、と言えどどのように総括できるのでしょうか。生活科、総合的な学習、週5日制、創意の時間、算数的活動、教科横断、問題解決的な学習過程、学級会から学級活動へ・・・思いつくままに並べてみただけでもたくさんのキーワードが浮かんできます。

特に生活科や総合的な学習の時間は、創設当時ほどの学校でも苦勞し、日本全国慌てて生き物を飼育し始めたり、PCでの調べ学習に傾倒したりして目の前の子供よりも教師の都合で題材が変わり、右往左往していた様子が思い出されます。一方、今でも教育課程の中心に生活科や総合的な学習の時間が位置づけられている学校は、指導体制が変わっても、持続可能な題材を開発し続けてきた、骨のある学校、とみることもできるでしょう。

昨年度来の新型コロナウイルス感染症対策による臨時休校がGIGAスクール構想を一気に加速させ、本町でも、一人一台の端末（Chromebook）が配布され、年度末には急ピッチで校内のWi-Fi環境も整えられました。教育委員会や保護者が期待しているのは、また臨時休校になった時の学習保障に他なりません。もちろん、そこに学校として異論はありません。ただ、それはあくまで短期的な目標であって、本来のGIGAスクール構想の理念や、ソサエティー5.0（Society 5.0）を生き抜く子供たちの目標ではありません。

令和3年度スタート。小野小学校GIGAスクールプロジェクト指導の1年です。

